

## 大学院博士課程体験記②⑥

春日 優介 (かすが ゆうすけ) 免疫学教室



私は北大医学部のMD-PhDコースに所属しております。MD-PhDコースは医学研究を志す医学科学生に対して、学部学生のうちから早期に研究をスタートする機会を与え、若手基礎医学研究者を育成するというコースです。学部5年生の際に応募し、入学試験を受けて合格することでMD-PhDコース

入学完了。具体的に何が異なるかと言いますと、①6年生の臨床実習3ヶ月間を全て研究活動に充てられること②大学院での奨学金が充実していること、この2点です。私は小学生の時から研究者になりたいと考えておりましたので、迷わずMD-PhDコースを選択しました。学部生の頃は生化学教室でお世話になっておりましたが、免疫学に興味を持ち、大学院は免疫学教室にて研究を行うことに決めました。

さて、かねてから基礎研究に憧れを持ち、無事にMD-PhDコースに合格した医学部5年生春日は、次の4月から始まる研究室生活に胸を躍らせていました。このような文脈で話が進む場合、次に来る一文はおそらく「しかし待ち受けていたのは地獄の研究生活だった」だと思います。次の情報を加えた場合どうでしょうか。2019年。私の大学5年生は、あの憎き2019年でした。6年生になった私は研究室に向かうことなく、自宅にてあつまれどうぶつの森で無人島開拓に精を出し、近所を人に会わないように散歩し、気が向いたら国家試験の勉強をする生活をしていました。これが私の研究者生活の始まりです。この時点ではMD-PhDコースの1つ目のメリットがほぼ失われた状態。6月に入ると少し緩和されて、時間制限があるものの研究活動を始めることができました。

私は免疫学教室に入学しましたが、このコロナ禍、コロナウイルスの研究をするのが社会需要に一致したものでしょう。当然我々の研究室でもコロナウイルスに関する研究を開始して、この研究に助教のサポートとして参加させていただきました。大学院から所属教室を変えた私は新たに覚えなくてはいけないことが多く非常に大変でしたが、同時に社会貢献できているという充実感もありました。人生最後の夏休みも研究をして過ごし、無事にこの論文を通すことができました。このコロナの研究は、研究の作法、戦略などの勉強になり、今考えても非常に良い経験でした。9月からは流石に国家試験の勉強があったため、研究は一旦止め、国家試験まで遅れを取り戻すべく勉強に励みました。

無事に医師免許を取得し医学部を卒業した私は今度こそと、2回目の研究者生活のスタートを切りました。今度は無事に想像通りの研究生活が始まりました。24時間研究だけに集中できる環境は人生でなかなかない時間だと思えます。ここでMD-PhDコースの2つ目メリットが活きてきます。奨学金です。研究者のイメージとしてはあまり豊かなイメージを抱く人は多くないでしょう。

特に博士課程の学生は苦勞している話をよく聞きます。しかし安定して十分な額の奨学金を受けることで、金銭のことを全く考えずに研究することができます。これは想像以上に大きいメリットで、頭のキャパシティを圧倒的に節約できますし、ストレスも非常に少ないです。おかげさまで集中して研究を行い、大学院2年生の終わり頃には一通り論文を完成させ、アクセプトに至ることができました。

ただだと私の研究生活を振り返ってきました。医学部の広報雑誌のこのような中間ページを読んでいただける方は、将来研究したいと思っている方や私の知人など、極少数であると思いますが、博士課程について、私なりに学んだことをまとめたいと思います。

1. 純粋に研究は楽しい。楽しさを忘れない。  
博士に進む理由はこれに尽きます。物事の最先端を自身の手で切り拓くのはとても楽しいです。
2. 頑張りすぎない。実験は8割失敗するもの。  
私は博士1年の夏頃にかかなりメンタルをやられました。頑張りすぎです。特にポジティブデータの出ない博士1年は誰にとってもきついでしょう。8割失敗するからこんなもなか、とうまくいかない日には片付けて帰宅するのが良いと思います。
3. 視野を広く持つ。目の前のことに囚われない。  
上と似ていますが、目の前の実験に囚われすぎて極度に視野が狭くなると、その実験の論文ストーリー上の重要性や、他の可能性などが見えなくなります。
4. 生活スタイルを確立する。  
個人的に思うのが、研究者はただだと研究しがちなのかなと思います。朝太陽の光を浴びて朝食をとりラボに行き、やることを決めたら集中して終わらせて18-19時には帰るのが良いのではないのでしょうか。

まだまだ駆け出しですが、以上が私の博士課程体験・学んだことでした。



ケープタウンでの国際免疫学会にて